特集 1

ベラルーシに新たな希望を
2500 の小さな命のために

16 年前チェルノブイリ原発事故により被曝した女性達は、いま赤ちゃんを産むことに大きな不安を抱えている。被災地に新しい希望をもたらすために生まれてくる小さないのちを守るため、今年度ＪＣＦは新生児支援に取り組みます。

新生児支援
取り組みまでの経緯

２０００年５月、活動10年の中間評価会議がゴメリで行われた。ゴメリ州執行委員会保健部長クリセンコさんは次のように報告した。

「ベラルーシの健康問題の一つに母子の問題があります。２０００年まで、ゴメリ州の１才未満の死亡率はベラルーシで一番高かった。97・98年は、生まれたばかりの１０００人の新生児の内15人が死亡しました。原因はさまざまです。ゴメリ州では、通常出産は10％、つまり90％が異常です。妊婦の疾患、胎児の病気、先天性の病理学の問題もたくさん発見されました。99年、ゴメリ州執行委員会保健局は母子の通常出産のためにかなりの予算を捻出し、赤ん坊の死亡を12人まで、減らすことができました」。ゴメリ州立病院の敷地内にベッド数１３０の産院がある。出産は年間約２５００人。

昨年７月、ゴメリ州立病院の看護婦

ゴメリ州立病院付属産科にて

寮のホールに、ＪＣＦが日本から送った医療機器が雑然と広げられた。これから日本から届いたたくさんの医療機器の設置が始まるという情報が病院内を駆け回ったのか、あちこちからお医者さんたちが集まってきた。産科主任セルゲイ・コバル先生もその一人。新生児用ベッドと心電図モニターが必要だと、運んでいった。エンジニアの方達が付いていき、病棟を見学してビックリした。95年にスイスから支援されたという保育器が5台、それ以外は何もない、と言っても過言ではない。保育器も設置以後のフォローは全くないそうだ。

９月、小児科の白血病プロジェクトで渡航した、信州大学の小池健一先生が初めて産科を視察した。白血病治療の経験から新生児専門医同士の検討が必要と、３月の松澤重行先生の渡航が実現した。

理事会決定・新生児支援

不安なく出産できる医療環境を！

ゴメリ州立病院玄関前にて3ヶ月の赤ちゃんを抱いたお母さん

5月31日、松本の事務局で開かれたＪＣＦ理事会に於いて、２００２年度チェルノブイリ医療支援の一環として、新たな新生児支援の取り組みについて話し合った。「チェルノブイリ原発事故によって、多大な放射能被害を受けた上に、92年の連邦崩壊後経済の破綻から、ベラルーシの人々は大きな負荷を背負っている。社会全体が停滞しがちな中で女性達は、被曝による不安と生活不安から、赤ちゃんを産むのをためらっている。出生率は下がり、人口は１０００万人を割って下降線をたどっている。事故から16年経ち、当

ゴメリ州立病院付属産科にて

保育器だけが新しかった

時の少女たちは、出産適齢期になった。もし、安心して赤ちゃんを産める環境があれば、この国の人々にとって、新たな希望が持てるかも知れない」と小池先生からの提案があった。オブザーバー出席の松澤先生は「機器がない、薬品がない中で、栄養、感染症の問題など解決していかなければならない課題が山積している」と現地報告した。日本では１０００ｇの未熟児は１００％助かるが、ゴメリでは１０００～１５００ｇの赤ちゃんの生存率は60％に過ぎない。今年度はこの子たちの命を助けることを目標にしたいと提案。その為に必要なサーチレイションモニター（心電図・血圧・血中酸素濃度測定装置）、超音波診断装置、呼吸器回路が必要である。メディカルエンジニアの廣浦理事から「なるべく新品を供与したい、予算的には３００万円が見込まれる」という意見があった。

「自分の経験からも女性達が不安なく赤ちゃんを産むことができたら、すばらしい支援になると思う。ましてやチェルノブイリの被災地では、たくさんの不安を抱えている。赤ちゃんへの支援は希望につながる」と京都事務局の鈴木範子さんの発言。同じく馬庭理事から「新生児支援が、チェルノブイリの放射能被害とどの様な関係があるのか」との意見が出された。出産に関する事故の影響など、今後調査を進めながら、生まれてくる赤ちゃんの命を救う支援をしていこうと、２００２年事業として取り組んでいくことに決まった。

ゴメリ州立病院附属産科にて

る前の白血病のこどもたちの生存率はわずか10%台でしたが、支援が始まった数年後にはほぼ70%に上昇しました（日本の生存率も約70%）。専門家の私たちにとっては驚異的な治療成績の向上でした。今年の３月に、首都ミンスクのベラルーシ小児血液腫瘍センターに第二の遠隔医療システムを構築しました。このセンターにはゴメリ州など放射能汚染地域を含むベラルーシ共和国全土から治療の難しいがんのこどもたちが集まっています。ゴメリ州立病院を中心に展開してきた医療協力を少しずつ広げることで、ベラルーシ共和国で不幸にしてがんになってしまったこどもたちを一人でも多く助けたいと思っています。抗がん剤などの治療体験を乗り越えたこどもたちが、病気を克服し社会へ出ていくことはこの国に明るい光を灯すと確信しています。

新生児支援プロジェクト

ベラルーシ共和国の人口は減少傾向にあり、1000万人を割りました。今、出産適齢期を迎えている女性は原発事故後に生まれたことから、出産することに不安と戸惑いをかかえています。前回の調査でわかったことは、日本ではほぼ100%助かる1000gから1500gの未熟児の赤ちゃんが、ベラルーシ共和国ではわずか60%の生存率でしかないことでした。皆さんのご寄付や臨床工学技士の方々のご努力で日本で使われなくなった検査機器や治療機器などをプレゼントできれば、女性たちが安心して赤ちゃんを産むことができるようになると思います。この国が経済的に社会的に困窮状態を脱するには、こどもたちをいかに健やかに育てるかではないでしょうか。赤ちゃんが無事に産まれ育つ環境作りは急務であると考えます。皆さんのご理解とご支援を期待しています。

ベラルーシ共和国に対する医療支援

子どもたちの明るい未来のために…

小池健一（信州大学医学部小児科）

小児白血病プロジェクト

1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原発事故では、放出された放射性物質が風に乗ってベラルーシ共和国へふりそそぎました。何事もなかったように見える広大な大地ですが、いまだに放射性物質は高濃度で残留しています。私たちは、1991年からベラルーシ共和国を訪問し、ゴメリ州立病院に入院した白血病のこどもたちに対する医療支援を行ってきました。そして、1997年には、JCFの支援のもとに日本と現地の医療スタッフが一致協力して第1例目の骨髄移植を成功に導くことができました。しかし、日本からはるかに遠い国であることから、緊急時の対応は不可能でした。1998年にゴメリ州立病院移植部に開設された遠隔医療システムにより、患者さんの状態や体の細部、白血病細胞の顕微鏡写真や胸のレントゲン写真などが日本にいながらにして見ることができるようになりました。これらにより、日本と現地医師の意志疎通は飛躍的に向上し、患者さんはより適切な治療を受けることができるようになったのです。また、白血病のこどものご両親とTV会話で移植前にお会いできることは、信頼関係を築くのに大いに役立ちました。遠隔医療により、会員さんや寄付を寄せて下さる方々の支援が、より有効に使われるようになりました。支援が始ま

ベラルーシ小児血液腫瘍センターにて

2002年度ＪＣＦ理事会

・チェルノブイリ新生児支援
・チェルノブイリを日本の子どもたちに伝えたい

５月31日、長野県松本市のＪＣＦ事務局に於いて２００２年度理事会が開かれた。出席理事７名、委任状10名、活動関係者のオブザーバー６名、事務局３名。なお、東京都世田谷区の澤畑勉さんがチャイルドラインが超多忙になり、理事を辞退された。

事務局より、２００１年度の白血病治療・健康診断が順調に遂行されたこと、公的配分金や助成金、一般市民の皆さんからの思いのこもった寄附金が寄せられ、順調に運営されていることが報告された。

２００２年度事業として、ゴメリ州立病院附属産科の支援が、提案され検討された。信州大学医学部小児科医師松澤重行さんから、第62次訪問時の現地調査報告があった。信州大学医療情報部の滝沢正臣さんから、衛星通信システムの利用の提案、メディカルエンジニアの廣浦学さんから必要な器材の調達見通しなどの意見があった。「事故当時の少女達が今、出産適齢期にさしかかっている。安心して赤ちゃんを産む環境を両国の協力で整えたい」という熱い願いに、チェルノブイリ事故との関連性の調査を同時進行で取り組んで行くことに決まった。また、継続事業として行っているポレーシェ学校の児童一般健康診断には、ロシア語のできる小児科医師衣川直子さんが今年から参加して下さることになり、お忙しい中、東京から駆けつけて下さった。更なるパワーアップが期待できる。

また、国内活動では、スライド「ナージャ　希望の村」の上映会を開催し、子どもたちにチェルノブイリを伝えていきたいと、スライド製作者鈴木範子さん、谷田部裕子さん、吉田理恵子さんから上映への工夫と子どもたちへの思いを聞いた。

継続的なチェルノブイリ被災地での白血病支援、児童健康診断、新生児支援。国内活動として、映画「アレクセイと泉」上映協力、スライド上映等が予算と共に承認された。

チェルノブイリ10ドリームズ７のステキなチラシもできました。

今年度も、皆さんと共にチェルノブイリからたくさんのことを学び合っていきたいと願っています。

Chernobyl 10 Deams 7

チェルノブイリ 10 ドリームズ 7

眠っているだけで
みんなをしあわせにしてくれる
きみの小さないのちをまもりたい

小さな生命を
まもりたい。

郵便振替口座	00520-6-10993
加入者名	チェルノブイリ（10）ドリームズ 7

Ⅰコース　新生児支援

◎支援予定機器（総額 500 万円相当）

①呼吸器回路　200 セット

② SpO_2 モニター 3 台　③エコー 1 台

Ⅱコース　小児白血病治療支援

◎支援予定薬品・試薬

（1 年間で総額 1000 万円相当の血液製剤、抗ガン剤、抗生物質等）

（詳しくは同封のちらしをご覧下さい！）

7月6日JCF事務局で今後の医療機器プロジェクトの動きについてメディカルエンジニア（ME）のみなさんと事務局のミーティングが行われた。神谷事務局長から6月の渡航時の機器の点検報告があり、10月渡航に向けて現在の進捗状況等について、具体的で熱心な話し合いになった。いろいろな難しい問題に直面してもユーモアとチームワークを大切にするMEチームの会議の一部を紹介しましょう。

メディカルエンジニア渡航準備会議

現地の笑顔が僕らの力！

神谷　では7月のME定例ミーティングを始めます。まず私から63次訪問団での機器の点検報告をし、10月のMEチームの渡航に向けて現在の進捗状況を確認して、今後の機器プロジェクトの進め方を検討していきます。

6月の渡航でのチェックでは、7階（手術室）、3階（診断科・小児血液病棟）の機器は順調に稼動しています。麻酔器・吸入器・手術用顕微鏡・手術用ベッドは良好でした。眼底カメラが使用できません。エコーのプローブがありません。また婦人科用内視鏡の滅菌方法が不明だそうです。

A　眼底カメラの方式を誤認してるんじゃないかな、この前説明したのになぁ～。送ったものは点眼

出席者
メディカルエンジニア(ME)5名…A～E
神谷事務局長・事務局員２名

薬を使って検査する散瞳式だから、点眼薬の要らない無散瞳式が欲しいということなのだろうか？

B　でも現地には無散瞳式は無かったから、散瞳式に使う点眼薬が無いのかもしれないよ。

神谷　現地のインフレはますます進んでいるので、それ用の点眼薬を入手するのは難しいかもしれない。点眼薬は入手できれば渡航時に持参することを検討します。

A　では次回の渡航時に点眼薬を持参して、再度説明しましょう。

神谷　では次回の渡航について。

A　ひとつ提案したいのですが、広い病院内で人を捜したり、それぞれの持ち場で必要な時に通訳さんについてもらえるように連絡を取り合う手段として、日本からトランシーバーを持参するのはどうだろう。国際携帯はそんなに何台も使えないし。前回人を捜したり仲間うちでの連絡に随分時間をとられてしまったから。

C　トランシーバーなら僕も持ってるよ、捨ててなければ持ってくよ。

D　モロジチノに行く時には修理工具を持参する必要があると思うぜ。

B　そう、帰ってくる時、次回の渡航のために病院のどこか鍵のかかる戸棚に保管してもらおうよ。

A　心電計の電極についてですが、使い捨てのものを使うのではなく、クリップ式の方が長期に使い廻せる。ディスポタイプの電極はそれ

が無くなると心電計を使用できなくなってしまうからあの国には不向きだと思う。

Ａ　今度７階のオペ室も少し改善したいと思っていたのですが、今年は新生児の方への支援になったので、少し心残りです。せめて今まで集まった物は届けたいし…。事務局からは小児が中心ということを言われたのですが、他のＭＥの方はどうですか？機器には小児専用ということはなく、大人も使えてしまうので、現地に行くと見て見ぬ振りはできないから…。

Ｅ　ＭＥチームとして出来る限りはやりたい。

Ａ　メンテもほんとはもう少し時間をかけてゆっくりやりたいよな。時間が無い部分はトランシーバー等で少しでも効率的にやる工夫はするけど…。

神谷　ＪＣＦが現地へもっていく医療機器については、チェルノブイリの子ども達への支援にターゲットを絞りたいと思います。必要な機器の購入についてはチェルノブイリ被曝治療関連に使う機器であるかどうか、医師の判断を聞いた上で、最終決定は理事長に一任します。購入が決定した機器は、最低３社からの見積もりを取り、ＭＥのみなさんから機器についての情報―中古で代替できるかどうか、新古品等が入手できるかどうか等―を集めて、事務局が購入についての最終決定をしていこうと思います。ＪＣＦの全体の予算とのかねあいもありますし…。助成

金縮小の現状の中でも、チェルノブイリ支援は細々でも続けていきたいので、機器を厳選して送っていきたいのです。送る機器が増えすぎると搬送、メンテナンス・消耗品の補充などをＪＣＦで背負いきれなくなります。各種の助成金もチェルノブイリ支援の枠を越えると審査をパスしなくなりますし。

Ｃ　ＪＣＦがそういう理念で成り立っているだから、他の部分はそれをやった上での話かな。

Ａ　ただでもらったものには大人使用の機器もあるが、その機器にもメンテ費用はかかる、それはどうするか？小児用でないとダメならそういう機器も断念するしかないので、割り切れないものも感じるなぁ。

Ｂ　子どもへの機器支援をした上でやっていくなら、いいのでは…。

Ａ　基本的に機器はいろんな目的に使うので、いい機器を送ればいろんな面で有用に使えるというところがある。当然子どもの治療にもプラスになると思う。

Ｄ　もともと僕らはエンジニアの集まりじゃないですか、技士の特性で「病院の機器が故障したから」と頼まれると、どんな場面でも断れないんですよ。だから現地で古い機器や壊れた機器を見ると、小児科の支援ではないから、とか分けられない気持ちにもなるんです。

（一同深くうなずく……）

◆ボランティア渡航についての家族の理解は？
・まあまあです…。
・ＪＣＦの活動について非常に理解はあるが長期間の渡航のため、健康、食事、安全面を心配している。
・我が子にはこうしたボランティアを通じて、世界観を感じてほしいと親として思うところもあり、理解はあります。安全面では心配しています。
・妻子共々理解している。特に父親の姿勢が子供への教育になれば…
◆ボランティア渡航についての勤務先の理解は？
・良好です。（今のところは……。）
・正直なところ、最初の１、２回は快く了承してくれたが、毎年特定の人間だけがボランティア休暇を利用することになるため、今後ボランティア休暇の利用は難しいと思われる。
・会社とは社会的にその存在理由を認められなければならないと思っていますので、ボランティアもひとつの存在理由であると理解してもらっています。
・理事長の勤務先であり有利であることは間違いない。しかし一般の病院、企業での理解は難しいと思う。
◆その他この際言っておきたいことは？
・某議員のためにボランティア、あるいは善意が金がらみのイメージをもたらしたことが残念でしかたない。私達の活動が今一度広く世間一般に浸透することを願っています。
・医療機器の整備拡充は小児医療に限ることなく病気に苦しんでいるすべての人への配慮が必要なのではないでしょうか？勿論出来る範囲内でのことですが…。

渡航準備ミーティングの後、ＭＥのみなさんからアンケートに答えて頂きました。

◆今回（次回）渡航での一番の「任務」は？

・小児科以外にも送ってしまった機械にできる限りのサポートをすること。
・医療機器の設置、取扱説明、前回までに現地へ送っている医療機器のメンテナンス。（２名）
・医療支援として送った機器の整備・メンテ・取り扱い説明など現地医療設備の向上を支援すること。

◆今回（次回）渡航で一番楽しみなことは？

・現地の医療従事者の笑顔。
・新規機器搬入施設の医療水準や医療現場の現状をみられること。
・以前設置、指導した機器が稼動して診療、治療、検査に役に立っているかどうか確認すること。
・秋のベラルーシの風景、景色。
・愉快なME部隊のメンバーとの同行。
・新しく、斬新な田舎料理を食したい（笑）レシピを教えてもらいたいですね。
・経済的に苦しんでいる現地（医療スタッフ）や我々を待ち望んでいる患者さんたちと接し気持ちを共有できること。

◆今回（次回）渡航で一番心配なことは？

・チームワークの乱れ。
・医療水準が低いため、事故にあったり、ケガ、病気になった場合の入院。
・渡航中の事故。車、テロ等安全対策にはいつになく慎重に考えてます。

モスクワ便り

今年の夏、私は初めて息子を連れてギリシャへ行きました。彼にとって外国へ行くこと、飛行機に乗ること、海と山を見ることは初めてでした。私は、初めてツーリストとして外国へ行きました。かつて留学か、出張か、外国に住んでいた友達へ遊びに行くことがありましたが、今回ビザの手続き、航空券の購入などを旅行社に任せました。よかったですよ。先ず文明の発祥地であるエジプト・ギリシャ・ローマを訪れようと思いましたが、残念ながら今のところエジプトは危ないので、ギリシャにしました。

ギリシャとローマの歴史に共通点があります。古代ギリシャの時代に今ロシアの地域であるクリミヤ半島とコーカサスが面している黒海の岸辺には、元ギリシャ人の居留地がありました。ローマ帝国の時代にギリシャはビザンチンの一部になりました。その首都はコンスタンチノポリであって、宗教はギリシャ正教でした。でも15世紀には、トルコのオスマン帝国はビザンチンを占領して、1454年にコンスタンチノポリに入って、それをイスタンブールに改称しました。ところでビザンチンの最後の皇帝であったコンスタンチン11世の姪はロシアのイワン雷帝の祖母でした。ロシア正教もロシア語のキリル文字もギリシャから取り入れられたものでした。私はギリシャにいた時、ところどころ両頭のわしというロシア国章の旗を見ました。ガイドさんが教えてくれたようにロシア国章も元のビザンチン国章です。トルコ人はギリシャ正教の代わりにマホメット教を普及させた後、ロシアが正教の中心になって、その意味でビザンチンの跡継ぎでした。ですからロシア国章はビザンチンの国章です。でもこの国章の色は金と赤―赤地に金色のわし―ですが、今ギリシャの教会に付いた旗は黄地に黒いわしです。これは喪の旗だと判明しました。コンスタンチノポリの陥落は今でもギリシャ人にとって暗黒時代とされています。ギリシャの空港には便掲示板に「アテネ―イスタンブール」ではなくて、「アテネ―コンスタンチノポリ」と書いてあります。

数百年が経ちました。その間トルコもギリシャも帝国の文化などはお互いに普及したでしょう。いずれにしても私がコーヒーショップでギリシャ・コーヒーを注文した時、トルコ・コーヒーが出ました。

イリーナ・ニコラエバ（ＪＣＦモスクワ事務局）

かけがえのないものたちが、人質に

臨界事故被害者の会・事務局長　大泉実成

村の生活が美しければ美しいほど、その生活が近い将来完全に死に絶えると言う事実は、痛ましく迫ってくる。

村の人たちの卓抜した手の技は、放射能汚染を着々と生の中に織り込んでいく。例えば、あの堆肥の中には、どれだけの汚染物質が蓄積されているのだろう。あの綿で織られた布に「はかるくん」をかざすとどうなるのだろう。

泉は、この村の中で、ただ一つの救済的なシンボルとして立ち現れる。

地下水はあらゆる汚染物質の行き着く先の一つである。近い将来、この泉の水も汚染はまぬがれない。それでもアレクセイの泉は、癒すことをやめないだろう。

何度か「もう見ていられない」というシーンがあった。

老夫婦は、村の収穫を手に、町に住む子供と孫に会いに行く。二人は、そのバスの中で、何かにすがるように手を握り合う。子供と孫にあたたかく迎えられ、しかし老父はついに泥酔する。ごく当たり前に子供や孫に会いに行っただけなのに、それはごく当たり前ではないと、誰もが知っていた。そしてそのことに、誰一人触れようとはしなかった。

自分の命より大切な子供。さらにいとしい孫。自分達が育って、当たり前のように思っていた豊かな自然。そして、話しかけながら育てていった、動物や植物たち。

全ての、このかけがえのないものが、放射能というものに汚されてしまう。あのたまらないもの、どうにもならないものに。

臨界事故に関わった人間は、この事実に無関心ではいられない。この事故を通して、子供を放射能にさらすことがどれだけつらいことなのか、しかもそれを訴えることがどれほど難しいことなのかを、多くの親たちは身を持って知ることになった。原子力のあるところでは、かけがえのないものたちが、人質にとられていたのだ。被曝してはじめて、そのことを知る。いったいどの親が「うちの子供はこんなに被曝したんだ」と言い出せるのか。子供が、家族が、自

那珂町通信

春号に寄稿してからの数ヶ月間に、実にいろいろなことがありました。そのひとつが『アレクセイと泉』の上映会です。

ＪＣＯの事故を経験し、数々の原子力施設が立地する東海村で、多くの人と共にアレクセイを観ることができました。ここに私達の声の代表として、ＪＣＯ事故による経済的・身体的・精神的被害を受けた人のために尽力なさっている大泉さんの感想を紹介します。

追伸：この通信欄でもお伝えした国際熱核融合実験炉の国内候補地は、那珂町ではなく六ヶ所村になりました。私達は複雑な気持ちです。どこに設置しても願いは同じ、皆が命への思いを尽くし、心を開いた対話の後の選択のもとに暮らせますように。未来への不安を少しでも減じていけますように。

谷田部裕子(ナージャの輪)

写真提供　本橋成一

然が、そして自然の力によってはぐくまれる作物がすべて人質にとられていたのである。

『アレクセイと泉』は、様々なシーンで、このことを哀切に想い起こさせた。それにしても原子力とは、弱者に対して、何と残酷なものなのだろう。汚染や廃棄物が無毒化するために、僕たちの子供は、あと何世代つらい想いを味わうのか。

やるせない気持ちの、行き場もなかった。

（「浜ぼうふう」第9号より転載）

写真提供　本橋成一

連載随筆

忘れないために1

宮尾 彰

NO.9

―二つの作品展から―

私たちにほんとうに必要なのは、もはや外側のことば、外側の声ではなく、自分自身のなかから、自分に問いかけてくることばではないか。

石原吉郎

壁にかかった畳数枚分はあろうかという合板。その一面に雑穀などを容れるジュート(黄麻)のずた袋が何枚も、丘陵のように襞をなして隆起したままに貼り付けられてある。そしてその全体が時には黒や褐色の、あるいはまた青や赤や黄色の油絵具でベッタリと彩色されている。袋と袋の合間にほつれた麻ひもが模様を描いて不思議な奥行きを感じさせる。題して『黒の風景(鎮魂)』、『地の骨』、『冬の光』、『花咲く大地』、『五月の空』…。春から夏にかけて横浜美術館で開かれた宮崎進(画家・造形作家1922-)の作品展は、むきだしの素材が沈黙の内にひしめき合い、やがて静かに語り始める世界であった。

『私はこの布に特別の愛着と、何よりも物質としての存在感や材質を越えた不思議な生命のようなものを感じるのである。』(以下『　』は作家自身のコメント)

「この布」とはジュートのずた袋を指している。作家は青年期の4年間、来る日も来る日もシベリアの強制収容所で、この粗雑な麻布に身を包んで寒さをしの

写真提供　本橋成一

いだのだ。帰国後長年キャンバスに油彩で描き続けたが、それではどうしても表現しきれないものがあった。

『人間を人間たらしめる力こそ私をつき動かすものであった。物質的な素材や麻布袋を使う仕事もその一つで、描写的とか装飾的な表現では思うことが出せなかったからである。』

極限の経験とその空気を伝えるために改めて麻布という素材と向き合う。これぞまさしく「自分自身のなかから、自分に問いかけてくることば」であろう。

『沈黙し通り去るのを待つ人間としてありたくない。この事実を何かのかたちとして止めたいし発言しなければならない。私は私なりに眼を透かしてその痛みを通して、痛恨の記憶をたどらなければならない。』

そして冒頭の詩人によれば「苦痛そのものより、苦痛の記憶を取りもどして行く過程の力が、はるかに重く苦しい」のである。本展に触れることで、我々は「戦争の世紀」を越えて「忘れないために」というテーマにたどりついた作家の希求を確かに委託された。

時同じく、都心の喧騒に潜んでもう一つの小さな回顧展が催された。

ズビネック・セカール(1923-1998)の彫刻展『鸚鵡(おうむ)貝の夢』(主催・ギャラリーTOM)。チェコの首都プラハに生まれ、十代の終わりにレジスタンス活動でナチスの迫害を受け、4年間の収容所生活を経験、その後1968年の「プラハの春」鎮圧後ウィーンに亡命。ついに祖国での安住を得ることなく彼の地に没した。彼もまた、自らを取り巻く時代や社会によって翻弄されながらも抜き差しならぬ孤高の道を歩み通した芸術家であった。

〈次号につづく〉

АНЕКДОТ

◆ Маленькая черепашка лезет на дерево. Цепляется, упирается, все-таки залезает на ветку и прыгаетот туда. В полете расставляет лапы, машет ими и брякается о землю. Хромая, снова лезет на дерево, прыгает и опять вся в ушибах забирается на ветку. За этим наблюдают две птицы в гнезде Потом одна говорит другой: «Слушай, пора, наверно, уже сказать нашему ребенку, что он приемный.»

◆ Мальчик говорит матери, которая одевает новую шубу.
Мальчик: «Зачем ты купила этот плод невероятных мучений несчастного животного?»
Мать «Как тебе не стыдно так говорить о родном отце!»

◆ Однажды президент Путин решил сам сесть за руль своего лимузина с затененными стеклами. Не справившись с тормозами, он на перекрестке въехал в крутой «Мерседес» с «новыми русскими». Один из них подошел к лимузину, посмотрел на водителя и, не вымолвив ни слова, с ужасом на лице вернулся в «Мерседес».
Его товарищ спрашивает «Ну, кто там в лимузине?».
Он отвечает: «Я не видел того, кто внутри... Но шофером у него сам президент Путин.»

ジーマの

ロシア小話

◆小さな亀が木を登っています。必死で木の枝にしっかりしがみつき、枝を這い、飛び降りて、手足をばたばたさせながら地面に落ちます。けがをしてびっこを引きながら、また木を上り、枝から飛び降りて、傷だらけで登っています。
その光景を、巣から２羽の鳥が眺めています。そして、１羽の鳥はもう１羽に言います。
「もううちの子供に、彼は親戚だと言ってもいい時だね」。

◆子供は新しい毛皮外套を着ているいるお母さんに、言います。
子供：「母さん、あなたはなぜ、可哀そうな動物の苦しみの賜を買ったの？」
母：「自分の父をそんなふうに言ったら失礼でしょう」

◆ある時プーチン大統領は自分で､暗いフィルムをガラスに張ったリムジンを運転することにしました。乗ってみると、交差点で、不注意で２人のニューラッシャンの乗っていた立派なベンツにぶつけました。
ベンツからニューラッシャンが出てきて、リムジンに近づき、運転席にいる人を見ると、一言もなく、無骨な表情でベンツに戻りました。
友達が聞きます：「あのリムジンの中は誰？」
彼は答えます:「中は誰だか見えなかったよ。でもすごい人だと思う。だって、運転手は、プーチン大統領その人だったもの」。

―――ストレリツォフ・ドミートリーさんよりの
アネクドート―――